

名寄市だからできる、子どもたちの教育に望むもの

委員長職務代理者 松田潤子

戦後の教育は理想を掲げるところから出発しています。戦前の日本は民主主義を体験したことがなかったですし、平和国家を作ることにも体験していませんでした。また、経済的にもみんなが食べていけるような豊かさを体験したことがありませんでした。食べるために必死という状況から早く切り抜けたいし、戦争を考えなくても済む平和な国家をつくりたい、何よりも国民が主人公といえる制度を広げたい、そういうことを願って出発したわけです。なので、そこには理想なり、目指すべき目標がはっきりとあったのです。

それから70年近く、戦争もなく、それなりの平和主義は実現しました。豊かさでは、子どもたちに「たのむから食べてよ」というくらい飽食化してきました。さまざまな文化も簡単に手に入ります。とても豊かで平和な時代になったのですが、戦後のようなはっきりした理想や目標を見失いがちになり、世の中でどう生きていくか、どういう社会を作ろうかということが問われなくなり、生きがいが個人化、非社会化してきて、それと同時にぼやけてきているように感じます。

しかし、「人間が生きる時に何を喜びとするのか？」ということは、今も昔も変わっていないように思います。自分の個人的な願望をどう実現するかということももちろん大切ですが、自己実現だけではなく、他者の役に立つということが、生きていく上での喜びとなり、もうひとつの存在証明なのだと思います。自分が存在していることの意味を誰かの役に立つことで定義される、そのことを忘れてしまって、苦しんでいる子供たちがいっぱいいるような気がします。

私は、この街の教育委員として携わってきて、ここ名寄市で育まれている子供たちには、名寄市ならではの人と人とのネットワークの強さや温かさを生かした、地域の方たちとの交流学习を大切にしてもらいたいと強く願っています。極寒の中、子供たちの安全を守るために登下校時街頭に立って下さっている町の方々の思いや、学校菜園を作る際に協力して下さる地域の方々の熱意などを、敏感に感じて欲しいのです。また、ボランティア活動も積極的に取り入れて欲しいです。

どんなに時代が変化しても子育て、教育には綿密な人と人との連帯が必要だと思います。自分に愛情を注いでくれる大人たちを見て、また自分を必要としてくれる活動を通して、子供達は感謝の気持ちや「誰かのために役に立ちたい」という気持ちをより多く体感できると思うのです。子供をめぐる社会環境が深刻化している今だからこそ、学力向上のアプローチとともに、地域を巻き込んだ学校教育が大事だと思うのです。